

症例から考える真菌症： 診断・治療の難しさ、感染症としての面白さ 司会のことば

¹千葉大学 真菌医学研究センター 臨床感染症分野、²東邦大学医学部 病院病理学講座

亀井 克彦¹、渋谷 和俊²

真菌症、特に深在性真菌症はわかりにくいといわれる。カンジダ症、アスペルギルス症、クリプトコッカス症など、一見すると疾患数は少ないように思えるが、実際はそれぞれの疾患の原因となる菌種は意外なほど多く、それぞれが病態、薬剤感受性等に特徴を持っている。さらには、接合菌、*Fusarium* spp.をはじめとする糸状菌や *Trichosporon asahii*, *Rhodotorula* spp.などの酵母など、数多くの真菌があきらかな原因菌として頻繁に検出されるようになってきており、日常臨床で考慮しなければならない新菌種は飛躍的に増加した。一方、真菌症の診断法開発は進められているものの、このように多様化する真菌症に対して十分に対応できていない。また、治療法に目を転ずると、本年上市された caspofungin をはじめとして、治療法の中心的存在である抗真菌薬はその種類がかなり増えたものの、4種類8剤と一般抗菌薬に比べると未だきわめて少数であり、抗菌スペクトラム、抗菌力、さらには副作用、薬剤相互作用など、その使用を制限する要素が多い。種類の少なさを補うべく抗真菌薬の併用を検討しても、抗真菌薬にみられがちな拮抗作用の可能性が潜在的リスクとしてつきまとっている。病原体、病態が複雑で、そして診断、治療のいずれもしばしば難渋する、まさに「難しい」疾患といえるかもしれない。しかし他方では、これだけ複雑で多彩な病原体であることから病態、感染機構等、解明すべき点が多く、研究対象としてはこれから無限ともいえる大きな広がりを持つ疾患でもある。本シンポジウムでは真菌症の診断と治療に焦点を当て、臨床あるいは臨床微生物学的立場からそれぞれを得意とする専門の演者の先生方に症例をご呈示いただき、その解説を通じて真菌症への理解と興味を深める機会としたい。